「アジア日本研究ネットワーク」第三回会議

―「日本文化」の可能性―

日　時：2017 年 2 月 18 日（土）～ 2 月 19 日（日）

場　所：チュラーロンコーン大学文学部マハーチャクリーシリントン・ビル

主　催：チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座

共　催：Chula Global Network ／ 京都大学アジア研究教育ユニット ／
アジア日本研究ネットワーク委員会

《会議日程》

総合司会　近藤めぐみ（チュラーロンコーン大学）

《第一日目》2017 年 2 月 18 日（土）　　　　○敬称略

9:30	受付開始 於）チュラーロンコーン大学文学部マハーチャクリーシリントン・ビル 304 教室
10:00-10:15	開会の辞　Yuphawan Sopitvutiwong （チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座主任）
基調講演	
10:15-11:15 （60 分）	佐野 真由子（国際日本文化研究センター） 「幕末外交儀礼から考える日本研究の可能性――本当に丸い地球のために」
休憩　11:15-11:30　（15 分）	
研究会Ⅰ　＜研究発表＞ 司会　河合 淳子（京都大学）	
11:30-12:10 （40 分）	周 維宏（北京外国語大学） 「日本近代化における文化近代化の測定指標について」
昼食　12:10-13:20　（70 分）	
研究会Ⅱ　＜研究発表＞ 司会　佐々木 幸喜（岡山大学）	
13:20-14:00 （40 分）	Himawan Pratama（インドネシア大学） 「クールジャパン政策以降における新たな日本像：インドネシアを事例として」
14:00-14:40 （40 分）	呂 佳蓉（国立台湾大学） 「サブカルチャーの伝播と受容：台湾における日本語の借用語を例にして」
休憩　14:40-15:00　（20 分）	
研究会Ⅲ　＜事例報告＞ 司会　呂 佳蓉（国立台湾大学）	
15:00-15:30 （30 分）	朴 麗玉（慶北大学） 「地域社会における日本文化教育―韓国大邱市を中心に―」
15:30-16:00 （30 分）	Patcharaporn Kaewkitsadang（タマサート大学） 「日本語の「聞く」「話す」能力向上を目指すスカイプ利用」
16:00	記念写真撮影

《第二日目》 2017 年 2 月 19 日（日）

研究会Ⅳ ＜事例報告＞ 於）チュラーロンコーン大学文学部マハーチャクリーシリントン・ビル　401/18 教室 司会　Yuphawan Sopitvutiwong（チュラーロンコーン大学）	
10:00-10:30 （30 分）	河合 淳子（京都大学） 「短期留学プログラムにおける学生合同セミナー：何をどのように発表し、議論するのか」
10:30-11:00 （30 分）	佐々木 幸喜（岡山大学） 「外国人留学生を対象とした日本文学教育の実践例と課題―岡山大学短期留学受入プログラム生の場合―」
11:00-11:20 （20 分）	Chomnard Setisarn（チュラーロンコーン大学） 「チュラーロンコーン大学文学部日本語学科の Honors Program」
昼食　11:20-12:20　（60 分）	
学生研究紹介 司会　朴 麗玉（慶北大学）	
12:20-12:50 （30 分）	Penpisut Kedgan（4 年生） 「日本人女流作家の短編小説にみるタイ表象―「ホテル・オリエンタル」と「天国の右の手」を対象に―」 コメンテーター：佐々木 幸喜（岡山大学）
12:50-13:20 （30 分）	Tippa Sirisajjawat（3 年生） 「京都と岩手の昔話における樹木の描写と意義の比較」 コメンテーター：佐野 真由子（国際日本文化研究センター）
13:20-13:50 （30 分）	Parida Jirawuttinunt（3 年生） 「日タイ両語における ES 型心理動詞のアスペクトの対照研究―期間副詞および「ながら」の共起をめぐって―」 コメンテーター：呂 佳蓉（国立台湾大学）
休憩　13:50-14:05（15 分）	
ネットワークミーティング　14:05-14:35（30 分） 司会　Chomnard Setisarn（チュラーロンコーン大学）	
14:35	閉会の辞　河合 淳子（京都大学）

■研究発表 40 分程度（発表 20 分＋意見交換 20 分程度）
■事例報告 30 分程度（発表 20 分＋意見交換 10 分程度）
■学生研究紹介 30 分程度（発表 15 分＋コメント 5 分＋質疑応答 10 分）
■プロジェクターと PC は会場に用意しています（ただし、端子は Windows のみに対応）。
■ご自身の PC を使われる場合は、接続の確認をあらかじめお願いいたします。

《PROGRAM》

Facilitator: Megumi KONDO (Chulalongkorn University)

《 Day 1 》 February 18 (Sat), 2017

9:30	Registration at Room 304, Maha Chakri Sirindhorn Building, Faculty of Arts, Chulalongkorn University
10:00-10:15	Opening Remarks : Yuphawan SOPITVUTIWONG (Chulalongkorn University)
Academic Lecture	
10:15-11:15	Mayuko SANO (International Research Center for Japanese Studies) Diplomatic Ceremonial during the Last Decade of Tokugawa Rule and the Possibilities of Japanese Studies: Towards a Truly Just World
Break 11:15-11:30	
Session 1 <Research Presentation> Chair : Junko KAWAI (Kyoto University)	
11:30-12:10	Weihong ZHOU (Beijing Foreign Studies University) On the measure index of Japanese culture modernization
Lunch Break 12:10-13:20	
Session 2 <Research Presentations> Chair : Yuki SASAKI (Okayama University)	
13:20-14:00	Himawan PRATAMA (University of Indonesia) The New Images of Japan in Indonesia After “*Cool Japan Initiative*”
14:00-14:40	Chiarung LU (National Taiwan University) The spread and reception of subculture: a case study of Japanese loanwords in Taiwan
Break 14:40-15:00	
Session 3 <Practical Reports> Chair : Chiarung LU (National Taiwan University)	
15:00-15:30	Lyu Ok PARK (Kyungpook National University) The Japanese Culture Education in a Community-focusing on Daegu city, South Korea-
15:30-16:00	Patcharaporn KAEWKITSADANG (Thammasat University) Improving Japanese Listening and Speaking Skills Through Skype
16:00	Commemorative photo

《 Day 2 》 February 19 (Sun), 2017

Session 4 <Practical Reports> at Room 401/18, Maha Chakri Sirindhorn Building, Faculty of Arts, Chulalongkorn University Chair : Yuphawan SOPITVUTIWONG (Chulalongkorn University)	
10:00-10:30	Junko KAWAI (Kyoto University) Conducting joint student seminars during short term study abroad programs: Experiences from the field
10:30-11:00	Yuki SASAKI (Okayama University) Report on the teaching Japanese Literature to foreign students: In the case of "Study Abroad Program for Undergraduates (3+1)" at Okayama University
11:00-11:20	Chomnard SETISARN (Chulalongkorn University) The Honors Program of Chulalongkorn University: Focusing on Japanese Section Curriculum
Lunch Break 11:20-12:20	
Research Presentations by Chulalongkorn University Students Chair : Lyu Ok PARK (Kyungpook National University)	
12:20-12:50	Penpisut KEDGAN (Fourth-year student, Chulalongkorn University) The representation of Thailand in Japanese Woman Writers' Short Stories －The Case of *'Hotel Oriental'* and *'Tengoku no Migi no Te'*－
	Commentator : Yuki SASAKI (Okayama University)
12:50-13:20	Tippa SIRISAJJAWAT (Third-year student, Chulalongkorn University) A comparative study of trees and their significance in Kyoto and Iwate folktales
	Commentator : Mayuko SANO (International Research Center for Japanese Studies)
13:20-13:50	Parida JIRAWUTTINUNT (Third-year student, Chulalongkorn University) A Comparative Study on Continuing Aspect of Experiencer-Subject Psych Verb in Japanese and Thai : Focusing on Co-occurrence with Adverbs of Time and “Nagara”
	Commentator : Chiarung LU (National Taiwan University)
Break 13:50-14:05	
Business Meeting 14:05-14:35 Chair : Chomnard SETISARN (Chulalongkorn University)	
14:35	Closing Remarks : Junko KAWAI (Kyoto University)

要　旨

2017年2月18日（土）

講演

佐野 真由子（国際日本文化研究センター）

「幕末外交儀礼から考える日本研究の可能性——本当に丸い地球のために」

徳川幕府は、その最後の10年間、西洋諸国を相手とする外交儀礼の構築に熱心に取り組んでいました。1857年にアメリカ初代総領事タウンセンド・ハリスが江戸城に登り、第13代将軍徳川家定に拝謁したのを皮切りに、1867年、第15代徳川慶喜が大坂城で英・仏・蘭・米4ヵ国代表を迎えた最後の事例まで、計17件の将軍拝謁式が挙行され、その様式は先例をもとに調整が重ねられて、完成に至りました。

長く明治維新後の西洋化の一端としてのみ理解されていた日本の外交儀礼の嚆矢は、実は幕末にあり、この礎があってこそ、日本はその国際関係を早期に近代外交の土俵に乗せることができたのです。この過程は、「鎖国」下においても隣国朝鮮との間で友好関係を維持してきた、徳川幕府の経験の蓄積を土台としたもので、「西洋化」の文脈とは異なる、「内からの変革努力」と見なしうるものでした。

本講演では、このような幕末外交儀礼研究の一端をご紹介させていただきながら、日本研究を通じて世界史を考える——押し寄せてくる西洋文明にアジアがどう対したか、という固定的な視角を超えて、アジアからの世界史を書いていく——可能性を、展望してみたいと思います。

研究発表

周 維宏（北京外国語大学）

「日本近代化における文化近代化の測定指標について」

社会学の一般理論によればひとつの国の近代化は普通、四つの側面があるといわれている。すなわち政治、経済、社会と文化のそれぞれの近代化である。文化の近代化は西洋では近代化の出発点だといわれていた。また西洋では近代化は第一段階（17 世紀—1970）と第二段階（1970－現在）に分けられて文化もそれぞれモダン、ポストモダンの特徴がもつといわれる。近代化の段階の測定には政治、経済、社会の側面と比較して文化の近代化は割合に難しい。特に計量化的な測定には完成された方法がなくまだ大きな課題が残されているといえる。本論は日本文化の近代化の測定を課題にし先行研究を整理するうえで測定の指標を考える。また日本の文化近代化を課題にするとき主に二つの問題点がある。ひとつは文化の近代化が近代化の出発点になれたかどうか。もうひとつは文化の近代化が圧縮されたかどうか、圧縮されたら如何に圧縮されたのか。本研究はこれらの問題も念頭に戦前（－1970）と戦後（1970－）の日本文化の近代化を西洋のそれと比較して社会学的な方法で検証していく。本論の構成は次のようである。

始めに
一、先行研究
二、本論の枠組みと方法
三、第一近代化における日本文化の測定
四、第二近代化における日本文化の測定
終わりに

Himawan Pratama（**インドネシア大学**）

「クールジャパン政策以降における新たな日本像：インドネシアを事例として」

クールジャパン政策により、日本政府は「クール」という新たな日本の像を構築している。その目的は日本人口減少による国内需要停滞の解決として、特にクリエイティブ産業（ポップカルチャー産業を含めて）のための海外市場の開拓支援にある。よって、クールジャパン政策を政府がどのようにポップカルチャーを通じて、海外向けの国のイメージブランディングを構築しているかについて、非常に良い事例であろう。しかし、言うまでもなく海外向けのイメージ構築は一方的なプロセスではあるまい。対象国における既存の日本像、特に日本に対する既存のネガティブなステレオタイプ、も存在しているので、「クール」という新たなポジティブな像を構築するにあたっては、既存の日本像に対応する必要があるであろう。例えば、インドネシアでは大抵の人が日本に対して、ポジティブなイメージを持っているものの、戦時中の記憶や、アダルト・エンターテイメントなどに由来するネガティブなイメージも抱いている。

本稿は先ずクールジャパン政策が発信しようとする日本像をどんなものかについて明らかにしたい。それから、その政策に関係した日本側がどのようにインドネシアにおける既存の日本像に対応しているかについて分析の上、クールジャパン政策がもたらした新たな日本像を解明したい。

呂 佳蓉（国立台湾大学）

「サブカルチャーの伝播と受容：台湾における日本語の借用語を例にして」

本稿では、台湾におけるアニメ・マンガ・ゲーム（ACG）の 愛好者の中でよく使われる日本語の借用語を考察する。日本の ACG 文化は東アジアだけでなく、世界中を風靡するといっても過言ではない。台湾でも日本の ACG 文化と関連する用語が大量に取り入れられ、サブカルチャーの愛好者の中でよく使われる。しばしば中国語の文法や語彙の意味を変えるほどの力を持っている。具体例として、本稿では、日本語の「N−向き」がどのように中国語に取り入れられ、中国語の「向」の意味変化を引き起こすかという事例を紹介する。このように借用語を研究することにより、サブカルチャーの伝播と受容を浮き彫りにすることができ、一方、語彙の意味変化を記述することもできる。最後に、サブカルチャーの伝播と受容は言語の変化を引き起こす要因の一つと結論付けられる。

事例報告

朴 麗玉（慶北大学）

「地域社会における日本文化教育—韓国大邱市を中心に—」

京都市、中国の長沙市そして韓国の大邱広域市が 2017 年の「東アジア文化都市」として選定された。「東アジア文化都市」とは日中韓の三都市の文化交流を通じて東アジアの相互理解及び開催都市の文化による発展を目指す事業である。大邱広域市はソウル、釜山に次ぐ韓国第三の都市で、リンゴと繊維産業、韓国有数の教育都市として知られている。

一方、大邱はかつて日本の植民地支配（1910-1945）を経験しており、現在もその痕跡が残っている。独特の歴史景観・都市景観を構成する当時の建築物の一部は「近代文化遺産」として保存され、歴史学習の場となっている。近年は観光の振興を推進するなど都市再生の「文化コンテンツ」として再発見・再認識され、地域社会と日本との関わりについても市民の関心が高まっている。

本発表では地域社会における日本文化教育の現状及び地域の特性を生かした教育実践の事例を報告し、課題と展望について考えたい。

Patcharaporn Kaewkitsadang（タマサート大学）

「日本語の「聞く」「話す」能力向上を目指すスカイプ利用」

海外で日本語を学ぶ学習者は日本語に接する機会が少ないため、タマサート大学では文化体験やスピーチなど「聞く」「話す」能力の向上を目指す活動を行ってきた。

本研究ではスカイプを取り入れた授業外活動により、学生の「聞く」「話す」能力を向上させることが可能か、またこの活動に対する学生の意見・評価を検討する。タイ人の日本語学習者の「聞く」「話す」能力向上を目的とし、スカイプを利用しての授業外活動を実施した。日タイの学生一人一人がペアを組み、スカイプを利用して、毎週 2 回ずつ、タイ人は日本語で 15 分、日本人はタイ語で 15 分会話を交わす。これを 2016 年 6 月から 8 月までの間、合計 6 週間行った。そして活動開始後と終了後にアンケート調査を実施した。その結果、学生の「聞く」「話す」能力が向上したこと、また学生の日本語学習に対するモチベーションが向上したことも確認された。

以上の理由により、スカイプを利用した学習活動は「聞く」「話す」能力向上において有効な手段であると考えられ、学生の意見・評価から、今後 LINE など他のプログラムの利用も検討する。またタイの学生は自己評価に慣れていない為、今回の調査では学生達が実力以下の評価を己にした傾向が見られた。よって今後は同活動の前後に会話能力テストを行うことも検討する。

2017 年 2 月 19 日（日）

事例報告

河合 淳子（京都大学）

「短期留学プログラムにおける学生合同セミナー：何をどのように発表し、議論するのか」

自分が身につけてきた文化や育ってきた社会の特徴について、多様な文化的背景を持つ人たちに紹介することは楽しくも困難な作業である。実際に紹介する際には、文化的背景の違いのみならず、専門分野も異なり、母語も異なり、時間的制約が設けられているなどの状況が加わる。このような中で、話し手、聞き手双方にとって、深い理解を伴う発表や議論とするためには、知識、発表技術、理解力、語学力、想像力、経験等といった様々な要素が必要とされるであろう。本発表では、京都大学学生と短期留学先の学生たちとが文化や社会問題について発表し、議論する場となっている「学生合同セミナー」について取り上げ、考察を進める。

本発表が対象とする短期留学プログラムとは、学休期間を利用して 2～4 週間程度、海外の大学に短期留学し、語学学習や実地研修学習を行うものである。京都大学では、いくつかのこうした短期留学プログラムを実施しているが、そのうち、筆者が関わっている(a)東アジア超短期プログラム、(b)アセアン SEND プログラムの年間計 7～8 件のプログラムの経験を紹介する。(a) (b)共に、本ネットワークの先生方のご協力を得ながら実施してきたもので、(a)が 7 年目、(b)が 4 年目に入っている。これらのプログラムのカリキュラムには、「学生合同セミナー」あるいはそれに準ずる取り組みを必ず組み込んでいる。これまでの経験をまとめ、いくつかの事例を紹介し、今後の充実につなげたい。

佐々木 幸喜（岡山大学）

「外国人留学生を対象とした日本文学教育の実践例と課題―岡山大学短期留学受入プログラム生の場合―」

報告者は現在、短期留学受入プログラム生を対象とした日本語・日本文化教育にあたっている。このプログラムは、日本国外の大学において日本語・日本研究を専攻とする学部学生を対象とするものであり、日本文化に関する理解を深めることを主たる目的としている。本発表で報告する「文学で旅する岡山」もまた、当該プログラムの教育活動の一つとして位置づけている科目である。当該授業では、報告者が作成したアンケートを初回に配布し、履修生の日本語学習歴、学習動機のほか、日本文学の授業内容に関する出身大学の実態を尋ねた。その中で、履修生の回答には、次の二つの傾向が看取できた。一つは、＜文学の授業は講義形式であり、長編小説の冒頭を日本語ないし母語で読み、その後、作家の考えを検討するというものだった＞というもの、もう一つは、＜履修生が挙げる日本人作家は、夏目漱石（1867-1916）、村上春樹（1949-）、東野圭吾（1958-）の三人にほぼ集中する＞というものである。本発表では、アンケート結果を承け、どのような基準で教材を選定したか、またどのような実践を行ったかを紹介したいと考えている。

チュラーロンコーン大学文学部日本語学科の Honors Program

Chomnard Setisarn（**チュラーロンコーン大学**）

「チュラーロンコーン大学文学部日本語学科の Honors Program」

チュラーロンコーン大学の Honors Program は学術強化戦略の一環として 2005 年に大学評議会の承認によって創設された。研究能力の高い学生の才能を伸ばすことを目的とし、通常カリキュラムより特定分野における深い学習が要求される同プログラムでは、成績優秀な学生のみが案内・選抜され、一定の要求基準をパスした者のみに参加資格が与えられる。文学部は創設当初より Honors Program に参加した学部の一つで、研究を志向するポテンシャルの高い学生向けの特別科目を用意している。参加学生は専攻で履修すべき科目の他に、各自の関心に沿った「自由研究」という科目を 4 つ履修し、同プログラム認定学生として卒業を希望する場合、卒業論文の提出が求められる。日本語講座の Honors Program が開始したのは 2009 年で、これまで 5 人の学生が参加している。学生たちは「自由研究」I～IVで日本文化、日本語学、日本文学それぞれを専門とする教員から密接な指導を受け、研究の基礎を身に着ける。そして卒論は最も関心のある分野のテーマについて執筆する。5 人の参加学生は実力が認められ、全員 1 年の日本留学の機会が与えられた。卒業生の内、一人は日本の大手企業に採用され、もう一人は日本の大学院に進学中。在学生 3 人もそれぞれ独自の研究に取り組んでいて将来進学希望であるため、同プロラムの当初の目的はほぼ達成されたと評価できる。

チュラーロンコーン大学学生による研究発表

Penpisut Kedgan（**チュラーロンコーン大学 4 年生**）

「日本人女流作家の短編小説にみるタイ表象―「ホテル・オリエンタル」と「天国の右の手」を対象に―」

本研究の目的はタイを舞台とした短編小説、森瑤子「ホテル・オリエンタル」（1988）と山田詠美「天国の右の手」（1997）を対象として、作中に表れるタイ表象を明らかにすることである。両作品に描かれている場所と出来事を分析し、タイがどのように描かれているかを考察した。分析の結果、両作品に描かれたタイの特徴として、（1）両作の主人公が滞在しているホテル内の空間が、主人公の日本人及び現地のタイ人の両者に非日常的な空間となっていること、(2)「ホテル・オリエンタル」にのみ、アメリカや日本のような経済大国を代表する人々が集まることで、作中のオリエンタルホテルが植民地的な空間として描かれていること、(3) タイが「天国の右の手」では、日本ではできないような性的体験を得ることができる南国として描かれているのに対し、「ホテル・オリエンタル」では主人公が自分自身を見つめ直すための場として描かれていること、が明らかになった。これらの結果から、森と山田が描くタイには「非日常的な場」のような共通性がみられるいっぽうで、「植民地的な空間」や「性的体験を得る場」など共通ではない描写がみられ、日本の女流作家が描くタイは一様ではないといえる。

Tippa Sirisajjawat（チュラーロンコーン大学 3 年生）

「京都と岩手の昔話における樹木の描写と意義の比較」

本研究は、京都と岩手の昔話を比較対象とし、両地域における樹木の意義と描写方法を明らかにし、その背景とそれぞれの地域との関係性を考察することを目的とする。これによって、それぞれの地域に伝わる昔話の特徴の把握を試みる。

『日本昔話通観　第 3 巻岩手』、『日本昔話通観　第 14 巻京都』に登場する樹木がどういう役割を持っており、どのように描写されているかを分析した結果、両地域の昔話において、樹木が有り触れた普通の樹木として描写されているが、境界としての役割を持っていることが多かった。しかし、岩手の昔話においては、樹木が超自然的な力を持ち、その力によって人間を援助したり害を及ぼしたりできること、樹木が敬われる存在として描写されていること、樹木の精と人間との共存が京都より認められていることなど京都の昔話と異なった点も見られる。その背景には、岩手の昔話は自然をより身近なものとして捉え、それを擬人化して不思議な存在として語ることが多いことと、岩手の民話が信仰の色が濃いことに関係すると思われる。一方、京都の昔話において、樹木が不思議な力の持ち主として描写されることがほぼない理由は、ある種類の動物を除き、自然に不思議さを加味して語ることが少ないという京都の昔話の性格に関係すると思われる。

Parida Jirawuttinunt（チュラーロンコーン大学 3 年生）

「日タイ両語における ES 型心理動詞のアスペクトの対照研究—期間副詞および「ながら」の共起をめぐって—」

ES 型心理動詞とは、「喜ぶ」などのような、文では経験者が主語に立つ類型である。三原(2000)は継続性の観点から、「長い間」などのような期間副詞と共起するもの、しないものという二つのグループに分けた。また、「ながら」との共起も心理動詞の継続性の有無を確かめる条件として扱った。

しかし、タイ語には日本語心理動詞と類似した意味を持ちながら、期間副詞と、「ながら」に対応する p^{h}laːŋ との共起において異なる性質を持つ動詞がある。そのため、本稿は、日タイ語の ES 型心理動詞における期間副詞および「ながら」の許容度を対照し、タイの日本語学習者が間違えるかどうか調べることを目的とした。

研究方法は、N3（9 人）、N2（8 人）、N1（8 人）の合格者を対象とし、14 問の心理動詞が期間副詞および「ながら」と共起した構文に対し、違和感を感じるかを問うアンケート調査を実施した。その結果、14 問中 9 問の誤答が見られた。学習者のレベルが高ければ高いほど、平均点が高いものの、それほど差がないと分かった。誤答の原因であると考えられるのは、①両語の心理動詞自体の異なる振る舞い、②心理動詞の「ている」とタイ語の‘paj’、‘jùː’との共起の違い、③「ながら」に対応するものとされる ‘p^{h}laːŋ’が主に動作動詞と共起すること、④タイの日本語教科書における例文。日本語教育の場で、ES 型心理動詞を指導する際、学習者のレベルによる制限があり、期間副詞と「ながら」の共起まで指導することは難しいが、学習者が学習して定着した後、もう一回自然な場面を提示し、導入すべきだと考えられる。

三原健一(2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8:54-75.